

現代行為論とヘーゲル —「事前の意図」は出来事か—

Contemporary Philosophy of Action and Hegel's Philosophy
— Are “Prior Intentions” Events? —

川 瀬 和 也

本稿は、M. ブラットマンによって展開された、現代行為論における事前の意図に関する理論が抱える存在論的な問題を指摘するとともに、この問題を解決するための指針を、『精神現象学』におけるヘーゲルの行為論の中に探るものである。これにより、事前の意図を時空間的な連続性によって個別化可能な心的出来事的一种として理解する存在論への対案を提示するとともに、行為に関するヘーゲルの考察に新たな光を当てることを目指す。

キーワード：行為の哲学、出来事存在論、ヘーゲル、精神現象学、事前の意図

目 次

- I はじめに
- II 事前の意図の問題
- III テイラーと行為の表現主義
- IV 『精神現象学』の行為論
- V 現代行為論への適用
- VI 結論

1 はじめに

ヘーゲルのテキストを参照しながら哲学研究を遂行するにあたって、現代哲学との対話の中でヘーゲル本来の洞察を引き出すという手法は、ひとつのスタンダードと言ってよいだろう。中でも最もよく知られているのは、J. マクダウェルと R. ブランドムによって展開された、認識論的ないしは言語哲学的な関心からヘーゲルを読み直すという試みである。また、哲学史研究としてのヘーゲル研究の文脈でも、1980 年代の終わりごろから、R. B. ピピンや T. ピンカードらによっ

て、現代哲学との対話を念頭に置いた読解が試みられてきた¹。

こうした潮流の中で、「行為」の概念に注目し、G. E. M. アンスコムやD. デイヴィッドソンらによって発展させられてきた分析的行為論とヘーゲルの実践哲学との接点を探る試みが、近年関心を集めている。C. テイラーの先駆的な業績に始まり、M. クヴァンテの *Hegels Begriff der Handlung* や A. スペイトの *Hegel, Literature and the Problem of Agency*、ピピンの *Hegel's Practical Philosophy* といった重要な研究が続々と発表されている。また、2010年には、ヘーゲル哲学と現代行為論の対話をテーマにしたアンソロジーである *Hegel on Action* も出版されている。

これらの試みにおいて分析の対象となってきた主要なテキストは、実践哲学的な主題が扱われる『精神現象学』（1807、以下『現象学』）と『法の哲学要綱』（1817、以下『法哲学』）である。『現象学』では、「理性」章の後半、および「精神」章が分析の対象とされてきた。『法哲学』では、第2部にあたる「道徳性」の箇所に行為（*Handlung*）に関するまとまった記述があり、これが主要なテキストとされてきた。先に挙げた先行研究では、スペイトの研究は『現象学』、クヴァンテの研究は『法哲学』に依拠している。また、ピピンの研究は、両方の著作での記述から、ヘーゲルの一貫した思想を再構成しようとするものである。本稿では、これらのうち『現象学』の中で行為に関する最もまとまった言及がある、「理性」章のCにおける議論に依拠してヘーゲルの議論と現代行為論の関係を探求したい。

本稿では、いわゆる「事前の意図」をめぐる現代の議論に照らすことで、意図と行為の関係をめぐるヘーゲルの議論から、現代にも通用する洞察を取り出すことを試みる。具体的には、M. ブラットマンによって展開された事前の意図の理論を検討し、それが存在論に関して問題を抱えていることを指摘する。これを踏まえて、この問題に関する新たな解決の方策がヘーゲルの議論の中に見出されることを示す。これにより、ヘーゲルの行為論に新たな光を当てるとともに、行為と意図の存在論的な身分が、時空間的な連続性によって個別化される出来事とは異なっていることを明らかにする。

以下、本稿の構成を示す。第II節「事前の意図の問題」では、「事前の意図」に関するブラットマンの議論を紹介し、その問題点を指摘する。第III節「テイラーと行為の表現主義」では、テイラーがヘーゲルに帰属する立場について検討する。第IV節『精神現象学』の行為論では、『現象学』のテキストをもとに、ヘーゲルが行為について何を論じているのかを明らかにする。第V節「現代行為論への適用」では、ヘーゲルの議論に照らして第II節で指摘した問題を再検討し、解決策を提示する。

II 事前の意図の問題

分析的行為論において論争的となってきたトピックに、「事前の意図」に関するものがある。デイヴィッドソンは、記念碑的な論文「行為・理由・原因」において、一旦は事前の意図という考え方を否定した (Davidson, [1963] 2001)。しかし、後年の「意図すること」において、事前の意図の考え方が復活させられることとなる (Davidson, [1978] 2001)。

「意図すること」において、事前の意図は、「一応の判断」と区別された「全面的判断」として特徴づけられる。一応の判断とは、「ある理由を考慮するという条件のもとである行為が一応のところ望ましい」という判断である。これに対して、全面的判断とは、ある行為は無条件に望ましい、という判断である。デイヴィッドソンによれば、意図は後者の判断にあたる²。川瀬 (2014) で詳しく論じたとおり、デイヴィッドソンの議論は、少なくとも自己矛盾的なものではない。しかし、この議論は、いかなる異論をも寄せ付けないという類のものでもない。

ブラットマンは、事前の意図という考え方が、あるトリレンマにぶつかることを指摘している³。ブラットマンは、「翌日のユナイテッド航空の便でボストンへ行こうと意図している」という例に則して、このトリレンマを指摘する。このような意図は、未来の行為へのコミットメントとして理解できる。しかし、彼によれば、「なんらかの未来の行為に今コミットしているとは、どういうことか」というさらなる問いに答えることは容易ではない (Bratman [1987] 1999, 4)。

コミットメントと、それと離れた行為とは別々のことがらである。しかし、私の意図は何らかの仕方で、私の後の行為に影響を与えるのでなければならない。そうでなければ、明日に関わる意図を形成するために、今日思い悩む必要がいったいなぜあるのだろうか。明日ユナイテッド航空の便に乗るという今日の私の意図は、一度形成されたならば、明日まで持続して、それから後の時点で現在の行為となるだろうものを導くように思えるだろう。しかし、おそらくはこのような意図は、今日から明日までの間に変更不可能ではない。そのような変更不可能性は、明らかに不合理であるように思われる。[...] しかしそうだとすると、明日になってそのような意図をゼロから形成することが私にとって合理的であるようなときに限って、私が明日もユナイテッド航空の便に乗ることを意図し続けるべきだということになるように思われる。しかしそうすると、なぜ私は今日のうちに明日何をすべきかを決定しようと思ひ悩む必要があるのだろうか。こうして、未来志向的意図は (1) 形而上学的に論駁可能である (それらは離れた行為を含むから) か、(2) 合理性について論駁可能である (それらは変更不可能だから) か、(3) 単なる時間の浪費であるかのいずれかだということになりそうである (Bratman [1987] 1999, 5)。

この議論は、事前の意図について論じるにあたって我々がクリアしなければならない最低限の基

準を示している。事前の意図を全面的判断だとするデイヴィッドソンの議論は、この基準を超えることができない⁴。

ブラットマン自身の眼目は、事前の意図の存在を否定することではなく、こうした可能な反論に耐えうるような、事前の意図ないし未来志向的意図についての理論を構築することにある。そのために提出されるのが、意図を「計画」として理解し、実践的推論を重層的・複合的なコミットメントを伴うものとして説明する「計画理論」である。

本稿では、計画理論の全貌を論じる代わりに、ブラットマンの言う形而上学的な論駁可能性という論点だけに焦点を定める。計画理論において、このトリレンマの第一の角、形而上学的な論駁可能性の問題はどのように回避されるのだろうか。

ブラットマンによれば、「後でAするという今の意図は、推論の特徴的な過程や、意図の維持および（非）再考慮の特徴的な過程を通じて後の行為を形作る」（Bratman [1987] 1999, 108）。意図は一度形成されると、その後の実践的推論において何が合理的で何が非合理的かを決定する場合がある⁵。また、一旦意図が形成されると、その意図について再考慮することは、可能ではあるが生じにくくなる。このような仕方では、事前の意図は行為に影響を与えることができる。ブラットマンは、このように考えることで、「事前の意図は離れた行為を含むために不可解である」という形而上学的論駁を回避できると考えている。

しかし、意図が推論に与える影響を指摘することは、形而上学的論駁を本当に免れているのであろうか。形而上学的論駁の眼目は、今日の時点で形成されたAするという意図が、明日の時点でのAするという行為においてまさに遂行され、実現されるように思える、という点の説明の困難さを指摘することにあつたはずである。形成された意図が以後の実践的推論に制約を課す、というブラットマンの議論は、Aという事前の意図が未来の時点でまさに実現されている、という事態を説明するものではないように思える。

この私の反論は、それだけでは、ブラットマンにとって決定的なものではない。彼自身も、形而上学的論駁において指摘されている問題が、Aするという事前の意図の遂行として後の行為があるという考えをいかにして説明できるのか、という問題であったことは承知しているからである。彼は、コミットメントには二つの次元があるのだとする。それは、「意志作用的」な次元と、「推論中心的」な次元である。私が上に指摘した問題は、この区別を用いると、推論中心的な次元でのコミットメントについての説明は、意志作用的な次元でのコミットメントに関する問題を解決するものではない、という仕方では表現できる。事前の意図が持つ意志作用的なコミットメントについて、ブラットマンは、「もし私の未来志向的意図が、行為の時点までどうにか生き残り、かつ、私がまさにその時が来たということと、何も妨げるものがないということとを見て取るのならば、そのとき、その意図は私の行為を支配する」という説明を与えている（Bratman [1987] 1999, 108）。意図が「どうにか生き残る」場合とは、意図が、途中の実践的推論の過程において、変更されない場合のことだと考えられる。途中の実践的推論の過程で変更されることがなかった

場合に限り、事前の意図は、その意志作用的なコミットメントを成就し、まさにその意図の遂行としての行為がなされることになる。

ブラットマンのこの説明は、形而上学的論駁の本来の眼目を認めた上で、それを回避するものとして、一見すると有効そうに思える。しかし、この説明にも、反例を与えることができる。それは、意図を二度変更する場合を想定した事例である。私が月曜日に、次の日曜日に宮崎から熊本まで自家用車で行くという意図を形成したとする。しかし私は水曜日になって、高速バスを利用の方が安価であるということに気づき、意図に変更を加えて、高速バスを利用するという意図を形成する。しかし金曜になって、バスが満席であることに気づき、再び自家用車で行くという意図を形成する。そして、この意図に基づいて、日曜日に自家用車で熊本に向かう。この場合に、日曜日に自家用車で熊本に向かうという行為は、単に金曜日に形成された意図の遂行であるだけでなく、月曜日に形成された意図の遂行でもあるだろう。しかし、ブラットマンの説明では、このことを説明できない。月曜日に形成された意図と、日曜日における私の行為とは、時間的に連続しているとはいかなる意味でも言えないからである。形而上学的反駁は、意図が、時間的に離れた行為において実現されるという点に形而上学的な問題を指摘するものであった。これに対して、ブラットマンは、意図が時間的に離れた行為を実現するという考えが形而上学的に不可解であることを認めた上で、合理的な仕方得意図が持続する場合が存在するというを指摘して、反駁を回避しようとした。しかし、私の挙げた事例を受け入れるならば、意図が時間的に離れた行為において実現されるという事態が実際に可能であるということが認められなければならない。

以上の議論は、意図に関する深刻な存在論的問題へとわれわれを導く。月曜日に私が形成した「自家用車で熊本に行く」という意図と、金曜日にいわば「復活」した「自家用車で熊本に行く」という意図とは、時間的に不連続であるにもかかわらず、単に同種の意図なのではなく、数的に同一な意図であるように思われるからである。そうだとすると、意図は不連続な時間と空間を占めるような出来事である、ということになる。しかし、不連続な、それゆえ複数の異なる時間と空間を占める一個同一の出来事がある、という主張は、われわれの直観に著しく反するのではないだろうか。

ここで指摘した問題は、以下の三つの命題をすべて同時に維持することはできない、という仕方得意式化される。

1. 意図は（心的）出来事である。
2. 出来事は、時空間的な連続性によって個別化される。
3. 「復活」の前後の意図は、時空間的に不連続であっても数的に同一である。

私は、第一、または第二の命題を否定することによってこの問題を回避することを提案したい。第一の命題を否定するという事は、意図は出来事ではなく、したがって時空間的な連続性によら

ずに個別化されると認めることである。こう考えるならば、意図は時空的な連続性ではなく、その内容によって個別化されるような存在者である。したがって、意図は通常の意味での出来事ではないということになる。第二の命題を否定することは、出来事存在論全体の大幅な見直しを要求する。いずれの選択肢が選ばれるべきかは、意図以外の様々な出来事について、同様の問題が生じないかを確かめることを通じて検討されるべきだと考えられる。これが意図のみに当てはまる特徴であるならば、意図を出来事とは別のカテゴリーに属するものと考えべきだということになるだろう。また、その他の出来事にも広範に同様の特徴が指摘されるならば、出来事存在論そのものの見直しが必要になるだろう。

ところで、われわれは、このような結論を支持する議論を、行為に関するヘーゲルの議論の中に見出すことができる。そこで、続く二つの節では、ヘーゲルの行為論について、詳細な検討を加える。その後に再び現代的な問題の検討へと戻ることとする。

III テイラーと行為の表現主義

現代的な行為論の文脈の中でヘーゲルにいち早く着目したのは、アンスコムと親交があり、ヘーゲル研究でも知られる政治哲学者の C. テイラーである。テイラーは論文「ヘーゲルと行為の哲学」において、ヘーゲルに、彼が「質的理論」と呼ぶ独特の立場を帰属している。

テイラーの解釈は、そのまま受け入れられるものではない。しかし、ヘーゲルの行為論の特徴を取り出すうえで、有益な視座を与えてくれるものである。したがって本節ではテイラーの解釈を詳細に検討し、その問題点と利点を明らかにすることで、次節におけるヘーゲルの議論の検討へとつなげたい。

テイラーがヘーゲルに帰属する行為に関する質的理論は、行為に関する因果説的な見方への対抗馬として提示される⁶。テイラーは因果説を念頭に、「何が行為を他の種類の出来事から区別するのか」という問いに対して、「それを引き起こすある種の原因によって区別する」と答える立場があることを指摘する。この立場では、「欲求、意図、あるいは欲求と信念の組み合わせ」によって引き起こされるような出来事が、行為として他の出来事から区別される (Taylor [1983] 2010, 23)。

テイラーは、次のように述べて、因果説とは異なる立場を提示する。

われわれは行為を、識別されていない出来事と特殊な種類の原因の観念とによって理解することはできない。これは、行為を他のプリミティブな概念で説明することである。しかし、第二の立場では、行為はそれ自体プリミティブである。行為と非行為との間には、基本的な質的な区別があるのである。(Taylor [1983] 2010, 23)

因果説的な見解においては、行為を出来事というカテゴリーに分類した上で、それを引き起こす原因が欲求や信念のような心的態度である、という基準を用いて、このカテゴリーから「行為」という種を切り出す、というアプローチが取られている。この場合、行為は出来事、心的態度、そして因果性の諸観念によって説明されることになる。これに対して、テイラーは行為をそれ自体プリミティブな概念として理解する、という方針を提示している。このように考える根拠は、「行為は、本質的に何かに向けられているとでも言うべきものであるという点で、非行為と質的に異なっている」と考えられるというものである。テイラーは、これに加えて、「目的は存在論的に行為から分離されない」というテーゼを唱える。明示的に述べられてはいないが、これらの主張を組み合わせた立場は、彼がこの論文以前に「表現としての行為」という論文で提示していた、「表現主義」の立場と一致する (Taylor 1979)。表現主義では、行為は欲求を表現するものとされる。

こうした議論は、切り口としては興味深い。しかし、テイラーの議論には複数の反論が可能である。第一に、テイラーがこの立場に基づいて展開する議論は受け入れがたいものである。テイラーは、行為の因果説が心身二元論に至るのに対し、彼の行為論は一元論を支持するのだと述べ、この点に彼自身の理論の優位性を見ている。しかし、行為の因果説はむしろ、物的な一元論と相性がよい。また、テイラーの支持する一元論はあまりに神秘主義的である。このため、彼自身による正当化は説得力を欠いている。

第二に、「表現としての行為」では欲求と行為の間の表現関係として述べられ、「ヘーゲルと行為の哲学」では行為とその目的が存在論的に分離できないという仕方でも述べられる、行為と心的状態の関係の内実が不明確である。

この点に関して、門脇俊介は、デイヴィッドソンやハイデガーと比較しながらテイラーの議論を整理している。門脇の議論は、テイラーにおいて不明確なままにとどまっていた行為と心的状態の関係の内実を展開しようとしたものとして理解されうる。しかし、そこでテイラーに帰属される立場も結局は曖昧さを残しているように思われる。門脇によれば、表現関係とは以下のような関係である。

欲求は行為によって不可分離的に表現されていると主張されている時の「表現」とはどのようなものだろうか。表現はまず、何ものか X が X と同一ならざる Y において具体化されて顕かになるということを必要条件とする。例えば、建物が今にも倒壊しそうだと、その建物が不安定に見えることから推論するような、「相貌の読み取り (physiognomic reading)」がそうである。表現とはこれに加えて、二つの十分条件を要求する。第一に、表現されたものがその表現においてしか顕かにならないということ。第二に、相貌の読み取りにおいては、 X が Y において観察されるだけなのに、テイラーの考える強い意味での「表現」においては、まさに Y (この場合行為) が X (欲求) を顕かにするのである。(門脇 [2008] 2010, 172)

この整理では、「表現」という関係が、「まさに顕かにする」という関係と言い換えて説明されている。しかしこの説明では、「まさに顕かにする」とはどのような関係であるのか、その内実は再び不明確なままにとどまっていると言わなければならないように思われる。

第三に、この立場をヘーゲルに帰属できるとする議論にも問題がある。「ヘーゲルと行為の哲学」において、表現主義的な行為論をヘーゲルに帰属するための根拠となるヘーゲルのテキストが明示されることはほとんどない。おそらくは『精神現象学』を念頭に置きながら、生命のプロセスと絶対精神の自己展開の調和という思想と、行為の質的理論に、一元論であるという点で類似性がある等と論じられるのみである (Taylor [1983] 2010, 32)。これらの問題のゆえに、テイラーの解釈をそのまま受け入れることは難しい。

以上三つの問題のゆえに、テイラーの議論は慎重な取り扱いを要するものである。しかし私は、行為を表現的なものとして捉えるという彼の洞察自体には、なお見るべきところがあると考え。以下、本稿では、『精神現象学』のテキストに基づいて、ヘーゲルに行為を表現として捉える傾向が確かにあることを示す。また、このヘーゲルとテイラーの洞察から、前節で提起した、時間的に不連続でありながら数的に同一であるような意図がある、という問題に対する示唆を取り出すことをめざす。

IV 『精神現象学』の行為論

『精神現象学』において、行為に関する最もまとまった叙述がなされているのは、いわゆる「理性」章(第5章「理性の確信と真理」、あるいは「C 理性」⁷⁾ C.「自己にとって即かつ対自的に実在的である個人性」 a.「精神的な動物の国と欺瞞、あるいはことそのもの」の箇所である。この箇所を読み解くことで、ヘーゲルが行為と意図の関係をどのように理解していたかを明らかにしたい。

まずは、この箇所の前後の文脈を確かめておこう。ヘーゲルは、直前の「理性」章の B.「理性的自己意識の自己自身による現実化」でも、「行為」に分類されるような事態についての分析を加えている。ヘーゲルの用語法を離れて簡潔にまとめると、現実世界の状況を踏まえることなく夢想された目的を実現しようと行為して挫折する、という構造をもつプロセスがここで分析される⁸⁾。これに対して、我々がこれから読み解く「理性」章の C の箇所、特にその前半部では、行為によって首尾よく目的が果たされるような場合が考察される。これらの分析を受けて、C の箇所の後半では、個人の行為が他者にとって持つ意味、あるいは逆に他者の行為が個人にとって持つ意味の考察へと議論が進行してゆく。こうした展開の中で、前後の議論も行為と関わりを持っているものの、最も典型的な行為についての分析がなされているのは、C の箇所である⁹⁾。

ヘーゲルはこの箇所で、行為には三つの契機があると言う。(1)「対象として、しかも、それ

がまだ意識に属しているような仕方での対象として、目的として現前し、それゆえなんらかの現前する現実性と対立している」という契機、(2)「静止したものとして表象される目的の運動、目的の、全く形式的な現実性への関係としての現実化、それゆえ移行そのものの表象、ないしは手段」という契機、(3)「為し手がそれを彼自身のものとして意識しているような目的ではもはやないような対象、為し手自らから出て来て、為し手に対してあるような対象」という契機の三つがそれである (GW 9, 217)。これらは、後に『大論理学』において「主観的目的」、「手段」、「達成された目的」としてより簡潔に整理される三契機に対応すると見てよいだろう¹⁰。すなわち、(1)は、行為者が頭の中に思い描く青写真としての目的である。これは意識の対象でありながら意識に属している。また、現実がその通りになっているのならそれが目的として思い描かれることはない、現実世界の状況、「現前する現実性」に對立しているはずである。次に、(2)は、(1)の目的を実現する行為そのものを指す。そして (3) は、(1) のような目的としての対象ではなく、行為によって生み出された帰結である。これは、「為し手みずからから出て来」たものであるし、その結果現実に、行為者の目の前にあるような対象である。

さて、『精神現象学』のヘーゲルは、これらの区別をした直後に、論述のこの段階では、「いかなる区別もない」のだと言う。彼によれば、思い浮かべられた目的も、その実現としての行為も、そしてその結果も、区別することはできない。それは、「内容がそれらの内で同一にとどまっている」からである (GW 9, 217)。こうした主張は、ヘーゲルの叙述にはよくあることだが、にわかには理解し難い。しかし、丹念に読み解けば、ヘーゲルが、続く叙述の中で、これらの主張についての説明を加えていることがわかる。何を意味してこのようなことが言われているのか、彼の議論を読み進めてみよう。

個人が行為するまでは、個人の行為の目的を規定することはできないように思える。しかし同時に、個人は意識であるのだから、個人は全く個人のものであり、すなわち目的として、行為を前もって自らの前に持っていなければならない。それゆえ行為のもとへと進む個人は、全ての契機が他の契機を前もって前提しているような、したがって、いかなる始まりも見出され得ないような円環の中に見えるように見える。これは、その目的であるはずのその根源的な本質を、個人はようやく行われたことから知るようになるのだが、しかし行うためには、その個人はその目的を前もって持っていなければならない、ということによる。(GW 9, 218)

ヘーゲルが述べているのは、一方では、行為が為されたあとで初めて、目的が何であったのかがわかるのだが、他方では、行為の前に意図があり、この意図のために行為がなされると考えられなければならない、ということである。

ここでのヘーゲルの主張のうち、後半部は難なく理解できる。行為の前に意図があり、その意図のために行為がなされると、通常信じられている。問題は、前半部である。行為が為されたあ

とで初めて目的が何であったのかわかる、という主張はにわかには受け入れがたい。しかし、続く議論を追うことで、ヘーゲルの真意が明らかになる。

ここで、テイラーの行為の表現主義との関係を整理することで、ヘーゲルの立場についてより詳しく見ておこう。後半の主張は、意図の表現としての行為からさかのぼって意図が知られる、というテイラーの表現主義と符号する。しかし、ヘーゲルは同時に、行為は意図を前提するとともに述べている。したがって、ヘーゲルは確かに行為をその原因としての心的態度から分析すれば事足りるという立場を取ってはいないが、行為が態度を単に表現するという立場を取ってもいいように思われる。ヘーゲルの立場は、行為と心的態度とは相互に依存しあって、いわば一つの「行為プロセス」を形成するというものだ整理できるだろう。

さて、ヘーゲルがその着想を最も詳しく展開するのは、「ことそのもの」の概念のもとでのことである。

個人性と対象性そのものとの対象的になった浸透としてのことそのものにおいては、自己意識にとって、自己意識の真なる概念が自らから生成しており、あるいは、自己意識はその実体の意識へと至っている。[...] ことそのものは [...] 単純な本質の形式なのだが、この本質は普遍的なものとして全てのその異なる契機を自己の内に含み、それらの契機にあてはまり、しかし規定された契機としてのそれらの契機に対して無関心でもあり、それだけで自由であり、この自由で単純で抽象的なことそのものとして、本質として妥当するようなものである。根源的な規定性ないしはこの個人性のことの異なる契機、すなわちその目的、手段、行いそのもの、現実性の契機は、この意識にとって一面では個別的な契機であり、意識はその契機をことそのものに対して見捨て、廃棄することもできる。しかし他面では、それらの契機はすべて、ことそのものを、ことそのものがそれらの抽象的普遍性としてそれらの異なる諸契機のそれぞれに即して自らを見出しそれらの述語でありうる、という仕方では本質として持つ。ことそのものはまだ主語ではなく、主語としてはかの諸契機が妥当する。なぜなら、それらの契機は個別性一般の側面にあたり、一方ことそのものはただようやく単純な普遍的なものであるにすぎないからである。(GW 9, 223-4)

ヘーゲルの叙述を整理しよう。ここでは、「個人性」と「対象性そのもの」との相互の「浸透」が、それ自体意識の対象となっている。難解な表現ではあるが、「個人性」を行為者、「対象性そのもの」を所与の世界内の対象と考えれば、「浸透」は、行為者が世界と関わりあうこと、すなわち、行為のプロセスとして理解できる。このプロセスがそれ自体意識の対象として捉えられるとき、これが「ことそのもの」である。ヘーゲルはこれを、「自己意識の真なる概念」であり、「実体」としている。「ことそのもの」が行為のプロセス全体、「本質」ないし「普遍的なもの」であるのに対して、行為の場面に即して論じられていた諸契機、すなわち、「目的、手段、行いそのもの、

現実性」の諸契機は、「ことそのもの」の個別的な契機だとされている。このような構造のもとで、ことそのものはそれだけでも本質＝実在 (Wesen) でありうるのだが、しかし諸契機に即して自らを見出す。また、諸契機を主語として持つ述語であるのだとされる。

「ことそのもの」が行為遂行プロセスの全体であるならば、それが、そのプロセスの諸段階としての目的、手段、行いそのもの、現実性のそれぞれを契機として持つということ、また、プロセス全体をとらえる際にはことそのものはそれだけで本質＝実在として理解されるが、その諸部分に即して見出されるということ、これらのことを理解するのはそれほど困難ではないだろう。しかし、ことそのものが、諸契機を主語として持つ述語である、とはどういうことだろうか。

私はこの文言に、行為遂行プロセスがいかにして一つのプロセスとして統合されるか、そのあり方の説明を見ることができると考える。「ことそのもの」とは、例えば、「タクシーを停めよう」と考え、手を上げてタクシーを停める」という行為プロセスの全体である。この中に、「タクシーを停めよう」という目的ないし意図、手を上げるという手段、タクシーが停まるという結果の全てが含まれていく。この例において、諸契機が主語、全体が述語であるということは、「タクシーを停める」という内容が、諸契機にあてはまる、ということとして理解できる。行為者は「タクシーを停める」という目的を持ち、「タクシーを停める」という行為を為し、「タクシーを停める」という結果をもたらしたのである。

ここに至って、これまで十分には明らかでなかった、これ以前の箇所でのヘーゲルの議論の意味も理解可能になる。行為の目的と行為そのものが互いを前提し合うのは、それらが一つのプロセスを構成する契機として存在するからである。また、内容が同一であるがゆえに行為の諸契機にいかなる区別もない、という主張も、行為の諸契機は、内容の同一性のゆえに一つのプロセスとして理解可能になっている、という主張として理解できる。

ここまで、『現象学』の叙述に基づいて、ヘーゲルが行為について何を述べているかを確かめた。ヘーゲルの立場は、意図のような心的態度と行為とは不可分のプロセスの契機として存在し、それらは内容の同一性のゆえに統一されている、というものである。以下では節を改めて、このヘーゲルのアイディアを現代行為論に適用するといかなる成果が得られるかを考えたい。

V 現代行為論への適用

本節では、ヘーゲルの立場が現代行為論にとって持つ意義を考察する。

前節で示したヘーゲルの立場は、(1) 心的態度と行為は一つのプロセスを形成しているという主張と、(2) このプロセスの統一は、内容の同一性のゆえに成り立つという主張とから成立していた。これを現代行為論の用語法でパラフレーズするならば、意図と行為が一体のものとして理解できるのは、同一の命題によって記述されることによってである、となるように思われる。φ

するという意図と、 φ するという行為とは不可分であり、一体となって行為遂行プロセスを構成する。それらが一体であるのは、いずれも「 φ する」という記述を持つ限りでのことである。

意図と行為を、同一の記述によって統一された不可分のプロセスとして理解するという立場は、一見すると奇妙であり、あまり説得力を持たないように思われるかもしれない。しかし、この立場ならば、第II節で示した、事前の意図についての形而上学的な問題を免れることができる。事前の意図についての形而上学的問題とは、行為者Sが、時刻 t_0 において φ するという意図 $I_0(\varphi, t_0)$ を形成し、時刻 t_1 において再考慮の末に φ することと両立不可能な ψ するという意図 $I_1(\psi, t_1)$ を形成し、時刻 t_2 に再び翻意して、 φ するという意図 $I_2(\varphi, t_2)$ を形成し、その後は意図を変更することなく、時刻 t_3 に φ するという行為 $A(\varphi, t_3)$ を遂行した、としたとき、 t_3 における φ するという行為 $A(\varphi, t_3)$ は、時刻 t_0 における意図 $I_0(\varphi, t_0)$ と時間的に不連続でありながら、その実現であるように思われる、というものであった。この問題は、記述 φ を共通して持つ限りにおいて、 $I_0(\varphi, t_0)$ 、 $I_2(\varphi, t_2)$ 、 $A(\varphi, t_3)$ が一体となって一つの行為遂行プロセス $P(\varphi)$ を構成すると考えることで解決できる。

この解決法からは、重大な存在論的な帰結が導かれる。それは、行為遂行プロセスは、出来事について広く受け入れられている、それが連続した時空間を占めるという特徴を持たないということである。現代を代表する出来事存在論である、出来事を特定の連続した時空間に生じることによって個別化されるものだと考えるクワインやデイヴィッドソンの立場も、出来事を個別化する要因に性質をも数えるキムの立場も、行為遂行プロセスを出来事として扱うことができない¹¹。このことは、行為遂行プロセスについての存在論が出来事存在論に大幅な改訂を要求するものであるか、あるいは、行為遂行プロセスは出来事ではないか、いずれかであるということを示している。

上で行為遂行プロセスに関して指摘したことは、事前の意図にも同様にあてはまる。行為遂行プロセスの中で、行為者の外部の世界に影響をおよぼす行為と、それに先立つ意図とは、一つのプロセスを構成してはいるものの、そのプロセスの二段階としては、区別することが可能であろう。このとき、意図 $I_0(\varphi, t_0)$ と意図 $I_2(\varphi, t_2)$ との存在論的な関係はどのようなになっているのだろうか。これらは、一個同一の意図なのだろうか。それとも、二つの意図なのだろうか。私は、これらは一個同一の意図として理解されるべきだと考える。なぜなら、これらを二つの別々の意図だと考えると、行為 $A(\varphi, t_3)$ は、二つの意図の実現であることになってしまうからである。この奇妙な結論を避けるためには、行為 $A(\varphi)$ は、一個同一の意図 $I(\varphi)$ の実現だと考えられなければならない。このとき、意図 $I_0(\varphi, t_0)$ と意図 $I_2(\varphi, t_2)$ は、 $I(\varphi)$ を構成する不連続な時間断片であるということになる。こう考えるならば、ここでも、出来事存在論に大幅な改訂を施すか、あるいは、「事前の意図」と呼ばれているものは、(心的)出来事という存在論的なカテゴリーに含まれない特殊な存在者であると結論するか、いずれかを選ばなければならなくなる¹²。

最後に、以上の議論に対して想定される反論を検討しておこう。それは、このように考えると、

行為に至らない、それだけで存在する事前の意図が不可解なものになってしまうのではないか、というものである。このような反論に対しては、私の議論は、行為遂行プロセスを構成しない意図の存在を否定するものではない、と答えたい。行為に至らない意図は当然存在する。意図は遂行されない場合にはそれだけで存在するが、遂行される場合には、行為と不可分のものとして理解されなければならない。このように考えることに不都合はないように思われる。

VI 結論

本稿では、第 II 節で、ブラットマンが事前の意図に関して展開する議論を紹介し、その上で、ブラットマン自身の解決法に存在論的な観点から見て不十分な点があることを指摘した。第 III 節と第 IV 節では、行為についての全く異なるアプローチとしてテイラーとヘーゲルの議論を参照し、その立場を合理的に再構成した。そして第 V 節において、ヘーゲルの議論を現代の議論状況に適用することで、第 II 節で指摘した問題への解決が得られること、またそれが、出来事存在論と行為遂行プロセスの地位のうちいずれかの変更を迫るものであることを示した。

以上の成果を受けて、残された課題は以下のものである。第一に、行為遂行プロセスについての存在論をより精緻に仕上げるという作業が必要である。本稿で行為遂行プロセスと意図について指摘した、時間的に不連続でありながら一つであるという特徴は、出来事とされている他の存在者にもあてはまるのであろうか。これが広くあてはまるのであれば、出来事存在論は大幅な改訂を迫られることになる。また、行為遂行プロセスに特殊な特徴であるならば、行為遂行プロセスに特殊な地位を与えればよいということになる。しかし、これらのいずれを取るべきであるのかは、本稿で明らかにすることはできなかった。

第二に、『精神現象学』の他の箇所や、他の著作におけるヘーゲルの実践哲学と、本稿で取り出された見解との関係を整理するという作業が必要である。また、本稿では、テイラー以外のヘーゲル解釈を主題的に取り上げることができなかったため、他の解釈と突き合わせる作業もこれから必要である。例えばピピンは、ヘーゲルの実践哲学は、行為の哲学を含め、『現象学』だけでなく他の著作とも一貫したものとして読解できると主張している。ヘーゲル解釈にまつわるこれらの論点については、相互に関わりあうものとしてさらなる探求の余地がある。

¹ 理論哲学におけるピピンの功績について詳しくは川瀬 (2016) を参照。

² より正確には、デイヴィッドソンは、全面的判断というカテゴリーに行為と純粋意図とが含まれると考えている。この点について詳しくは、川瀬 (2014, 70-2) を参照。

- ³ ブラットマンは、「事前の意図」ではなく「未来志向的意図」の表現を用いているが、本稿ではブラットマンからの引用箇所を除いて「事前の意図」を用いる。
- ⁴ ブラットマンはデイヴィッドソンの見解を、事前の意図を特殊な種類の欲求と同一視する見解だと分析した上で、その問題点を指摘している (Bratman [1987] 1999, 110)。
- ⁵ このような事例として、ブラットマンは、ビュリダン事例を挙げている。
- ⁶ テイラー自身は以下で批判する見方は「行為・理由・原因」をはじめとする一群のデイヴィッドソンの仕事にも帰属できるが、同時にデカルトや、経験主義哲学者たちにもあてはまるとしている (Taylor [1983] 2010, 23)。
- ⁷ 『精神現象学』は二種類の目次を持つため、章のタイトルが二重になっている。
- ⁸ このプロセスは、実現しようとした目的がいかなるものであったかに応じて、「快楽」「心の法則」「徳」の三段階に分けて詳しく考察されている。これらの三段階はそれぞれ、ゲーテの『ファウスト』、シラーの『群盗』、セルバンテスの『ドン・キホーテ』をモチーフとして持つと言われる。より詳しくは、Speight (2001) を参照。
- ⁹ マクダウェルは、「理性」章 B での議論は、『現象学』の主人公である意識が意図的行為という観念を獲得する途上の議論であり、C の箇所ですべて意図的行為が扱われると正しく指摘している (McDowell, [2009] 2010)。
- ¹⁰ ただし、『大論理学』におけるヘーゲルの力点は、『精神現象学』とは異なっている。川瀬 (2012a) および川瀬 (2012b) を参照。
- ¹¹ Quine (1985)、Davidson ([1985] 2001)、Kim ([1976] 1993) を参照。
- ¹² ここでの帰結が、「行為は出来事ではない」というテイラーの主張を支持するものではないことに注意。意図と行為を一体としてとらえる限りにおいてそのプロセス全体が出来事だと考えると問題が生じるが、その構成要素としての行為が出来事であると考えたことには問題がない。

参考文献

- [GW] Georg Wilhelm Friedrich Hegel, *Gesammelte Werke*, Rheinisch-Westfälische Akademie der Wissenschaft (Hg.), Felix Meiner, 1968- (略号 GW に加え、巻数とページ数で示した) .
- Bratman, Michael E. (1987) 1999. *Intention, Plans, and Practical Reason*, CSLI Publication.
- Davidson, Donald. 2001. *Essays on Actions and Events*, Second Edition, Oxford University Press.
- . (1963) 2001. “Actions, Reasons, and Causes,” in: Davidson(2001), 3-19.
- . (1978) 2001. “Intending,” in: Davidson(2001), 83-102
- . (1985) 2001. “Reply to Quine on Events.” in: Davidson(2001), 305-11
- 門脇俊介. (2008) 2010. 「行為とはなにか — 分析哲学からハイデガーへ」、『破壊と構築 — ハイ

デガー哲学の二つの位相』、第9章、163-185.

川瀬和也. 2012a. 「暴力」と「理性の狡智」——ヘーゲル『大論理学』における目的論の構成原理、『論集』第30号、東京大学大学院人文社会系研究科・文学部哲学研究室編、132-145.

——. 2012b. 「ヘーゲル『大論理学』の目的論と心身二元論」、『ヘーゲル哲学研究』第18号、日本ヘーゲル学会編、140-52.

——. 2014. 「行為とその合理化：共感・共同行為への問いの根底にあるもの」、『行為論研究』第3号、行為論研究会編、69-84.

——. 2016. 「ヘーゲル・ルネサンス——現代英語圏におけるヘーゲル解釈の展開」、『情況』第4期5巻第3号、情況出版、178-96.

Kim, Jaegwon. (1976) 1993. “Events as Property Exemplifications,” in: *Supervenience and Mind*, Jaegwon Kim, Cambridge University Press, 33-52.

Laitinen, Arto & Constantine Sandis. 2010. *Hegel on Action*, Palgrave Macmillan.

McDowell, John. (2009) 2010. “Towards a Reading of Hegel on Action in the ‘Reason’ Chapter of the *Phenomenology*,” in: Laitinen & Sandis(2010), 79-96.

Pippin, Robert B. 2008. *Hegel's Practical Philosophy: Rational Agency as Ethical Life*, Cambridge University Press.

Quante, Michael. 1993. *Hegels Begriff der Handlung*, frommann-holzboog.

Quine, Willard V. O. 1985. “Events and Reification,” in: *Actions and Events: Perspectives on the Philosophy of Donald Davidson*, E. Lepore and B. McLaughlin (eds.), Basil Blackwell, 162-71.

Speight, Allen. 2001. *Hegel, Literature and the Problem of Agency*, Cambridge University Press.

Taylor, Charles. 1979. “Action as Expression,” in: *Intention and Intentionality: Essays in Honour of G. E. M. Anscombe*, Cora Diamond and Jenny Teichman(eds.), 73-89.

——. (1983) 2010. “Hegel and the Philosophy of Action,” in: Laitinen & Sandis(2010), 22-41.

※本研究は JSPS 科研費 JP15K02010 の助成を受けたものです。

